

平成29年第1回 総合教育会議 会議録

- 1 日時 平成29年6月27日（火） 午後3時30分から午後4時38分まで
- 2 場所 碧南市役所4階 庁議室
- 3 出席者
 - (1) 碧南市長
 - (2) 教育委員会
委員 高橋世利子、委員 加藤讓、委員 池田香代子、委員 伊藤正幸、
教育長 生田弘幸
 - (3) 事務局職員
総務部長 金沢宏治、教育部長 奥谷直人、経営企画課長 生田和重、経営企画課主
幹 石川素子、経営企画課課長補佐 中川 知之、経営企画課政策推進担当係長 鈴
木好美
- 4 傍聴者 0人
- 5 議題
 - (1) 学校教育における課題について
 - (2) 意見交換

市長あいさつ

（市長）

こんにちは。本日は、大変お忙しい中お集まりいただきまして、ありがとうございます。また、教育委員会定例会後の会議ということでおつかれさまでございます。へきなんの教育行政は、比較的うまくいっていると感じております。月1回、三役での情報交換をしていることもありまして、非常にいい形で進んでいると思います。本日は意見交換の場などもございますので、皆様のご意見もお伺いさせていただきながら、よりよい教育行政ができるよう期待をしております。

議題（1）学校教育における課題について

教育長が資料に基づき説明した。

<概要>

最近、非行は大変少なくなっていますが、不登校という問題が解決できていません。

不登校になってしまうと、コミュニケーション能力が欠け、社会生活に支障が出るケースも生じ、何とかしたいと思っています。不登校の人数を、小学校は一桁、中学校はマイナス5にしたいと思っています。現在、様々な対策をとっている中で、ほっぷ倶楽部（集団指導フリースクール）も開設しています。まずは、ほっぷ倶楽部へ行けるようになって、そこから学校へ行けるようにしたいと思っています。現在、ほっぷ倶楽部は臨海体育館内にありますが、これを市中心部に持ってくることで、子どもが自力で通えるようになる、また、教育委員会や教育相談室と地理的に近くなるため連携を強化できます。このようにして機能を高めたいと考えています。

（市 長）

不登校の人数は、当市は少ないですね。

（教 育 長）

将来的には中学校を一桁に、小学校はゼロにしたいと思っています。少しでも環境がよくなれば、状況は変わってくると思います。スタッフも大変やる気になっておりますので、予算を少し投じていただければと思います。

委員のみなさん、先日の（スクールソーシャルワーカーの）視察を踏まえて、何かご意見はありませんか。

（委 員）

不登校を議題にされたことは、古くて新しいと感じました。中学校の62名は、そんなに多くないですね。この数字には現場の努力が伺えます。

不登校を減らす一つの方法として考えられるのは、親も知らない間に不登校に陥ってしまうことが多いため、入学式や年度の初めのPTA総会などの機会に、こういった現実をお話しし、情報を提供する、こういった事をやると成果が出るように思います。

（委 員）

学校は教育をするだけの場と思っていたのですが、実は福祉的な面が多くあることが分かりました。私自身が子どもの頃にはスクールカウンセラーや心の教室といった言葉を耳にすることはありませんでしたが、このような言葉を聞くようになったということは、福祉的な

部分が大きくなったのだと感じています。

先生はもちろん、家庭でも、それ以外の関わりのある人でもいいですので、生徒のモチベーションを上げられるような、やる気スイッチを入れることができるような方と出会えるといいなと思います。

(委 員)

私の周りには発達障害の子もいますが、親がそれを認めない場合があります。発達障害は、それを認め、違った対応をすることで気持ちよく生活できるようになるのに、それを認めず、小中と進む中で不登校になり、大人になってから診断されるというケースがあります。発達障害の勉強会が少ないと思いますので、勉強できる機会があるといいと思います。きちんと説明すれば、親も理解してくれると思います。

(委 員)

不登校対策として、先日視察に行った摂津市では、1千万円の予算でスクールソーシャルワーカーを雇い、改善したようです。しかし、特別な事をせずに、今ある現状を少しステップアップすることにより改善できるということなら、その方向で進めていくのもいいのではないかと思います。先ほど委員が言われたように家庭教育も大切だと思いますが、親が不登校だと子どもも不登校になるという不登校の連鎖もありますので、今、教育長が考えてみえるような事を進めていけば、外部から先生達がアプローチして連鎖を断ち切るといったこともしていただけるのではないかと感じました。ぜひ、市長もお力添えをお願いします。

(市 長)

子どもは長時間を家庭で過ごしています。子どもは敏感なので、親が夫婦関係なども含めしっかりやっていたら大丈夫だと思います。

(教 育 長)

子どもは、夫婦問題、嫁姑問題などを敏感に感じています。家庭問題にもいろいろなものがあって、福祉の面からのアプローチも必要です。

(委 員)

社会福祉協議会では、ソーシャルワーカーが福祉的な部分で相談に乗ったり、母子、高齢者、介護、障害等、それぞれの得意分野でがんばってみえます。しかし、それぞれのソーシャルワーカーが個々で動いていますので、市がそれらを一本にまとめて統括するような役割をしてくれるといいと思います。市役所にもソーシャルワーカーがみえると伺ったので、碧南市が総括的に全ての部分を担うようなシステムの構築を進めていただけたらと思います。

(市長)

これは、(前福祉子ども部長の)奥谷部長がやったことではないですか。

(教育部長)

現在、福祉の総合窓口は社会福祉協議会ですが、発達支援の子どもについて入学から卒業後まで支援を広げよう、総括的に支援しようということで、福祉課に発達支援係を作りました。今はソーシャルワーカーの力が分散的に配置されていますので、連携がとれるように努めたいと考えています。まず、発達支援係からそれを広げていこうと取り組み始めています。

(教育長)

市役所にソーシャルワーカーは何人いるのですか。

(教育部長)

福祉課に1名、高齢介護課に2名います。

(総務部長)

今年度も採用したいと考えています。

(教育部長)

社会福祉協議会には、10名近くおります。

(教育長)

碧南市の中に14、5名いるということですね。

スクールソーシャルワーカーの配置も以前には考えられたようですが、その方達が連携し

て動けるようなシステムができれば効果的です。

(委員)

学校の中にも入っていただけたら、その役割も担っていただけます。

(教育長)

ワーカーは事務的な説明はできると思いますが、保護者に話をするには、ある程度の人生経験や識見が必要となります。子育てを経験した委員のような方達のほうが保護者の理解が得られることもあるかと思えます。依頼がありました折には、お願いいたします。

(委員)

不登校への取り組みについて、これからも考えていくことはいいことだと思います。

議題（２）意見交換

<意見・質疑なし>